

# 日本教育

月刊

平成30年8月1日発行  
(毎月1回1日発行) 第479号

# 8

平成30年/8月号  
No.479

特集○自然の中の人間



公益社団法人日本教育会  
-Japan Education Corporation for the Public Interests-

日本教育

8月号

平成30年8月1日発行  
通巻479号

発行所 公益社団法人 日本教育会

TEL 03-5803-9707 FAX 03-5803-9708  
〒110-0024 東京都文京区湯島1-5-28 ナーベルちばの水2階204



公益社団法人日本教育会  
-Japan Education Corporation for the Public Interests-

## 第43回 全国教育大会 奈良大会



知の時代を創造するたくましい人間の育成

～高い志をもち、よりよく生きる力を育てる教育～

期 日 平成30年10月13日(土) 10:00～16:45

会 場 なら100年会館(JR奈良駅前 徒歩約300メートル)

- 各校園種からの提言
- シンポジウム「考え、議論する道徳」の推進に向けて
- 記念講演 演題 「万葉びとのこころ」

講師 奈良大学文学部 国文学科  
教授 上野 誠氏



お問い合わせ先 公益社団法人日本教育会事務局 TEL 03-5803-9707 奈良県支部 TEL 0744-29-8331

# 自然と共に生きる

—専門学校での取り組みから

はじめに

「おーい、次行くぞ。いいかー?」「はーい、オーケーです」「ちょっと待ってー!」……山間の棚田に声が響く。地元のリーダーの声に合わせ、横一線に並んだ学生たちが腰を折つて苗を植える。山梨県富士川町、標高七五〇メートルの集落での田植え風景である。メンバーやは高卒後すぐに専門学校に入学した十代の学生から、社会人経験もある五十代の学生まで様々。

この集落に当校学生が通うのは、もう二十年以上続いている野外実習の一環であるが、地元の田植え作業に従事するのは今回が初めてだ。それには二つの理由がある。一つ目は、実習の目的である生物や生態系に関する調査地の確保である。これまでも地元の方々の好



棚田での田植え風景（山梨県富士川町）

意により、ご迷惑をかけない範囲で地域の動植物の調査を行ってきた。しかし、この集落も中山間地の例に漏れず過疎化・高齢化が進む中で耕作が放棄される田畠が目立ってきた。そうした中、そこに生息・生育する生きものたちがどのように変わっていくのか、あるいは耕作を続けることでどのように維持されていくのか、等々の科学的データを、田植え、草取り、収穫のプロセスを通じて調査・記録していくためである。もう一つは、自然の中で生かされている人間社会の行く末について、この集落での生活・生産活動に目を向けながら考えていくきっかけをつかむためである。

南アルプス前衛の山々の懷に抱かれ、雲海の向こうに富士山を仰ぐことのできるこの地では、丁寧に積み上げられた石垣の棚田を豊かな水が潤し、長年にわたり人々の生活を支

**東京環境工科専門学校——開校の精神と目標**

一九九四年、東京・渋谷にあつた専門学校の一学科として、日本初の自然環境保全技術者養成を目指す専門課程が開設された。戦後五十年、とりわけ高度経済成長期からバブル経済期を通じて、日本の自然は開発の波にさらされ変貌を遂げてきた。あくせく働いて疲れた心身を癒すために、豊かな自然の中で

学校法人東京環境工科学園  
東京環境工科専門学校長  
**笠岡 達男**

さおか たつお  
東京大学農学部卒業後、環境庁（現環境省）で自然公園、野生生物、自然環境調査（緑の国勢調査）などの自然環境行政に従事。  
阿蘇くじゅう、上信越高原、中部山岳等の国立公園管理業務（レンジャー）、環境省生物多様性センター長、同国立公園課長、林野庁研究・保全課長などを経て現職。

余暇を過ごすというレジャー／リゾートブームも国民的な支持を得たかに見えた。しかし、ともすれば余暇の世界にも都市型経済の論理が持ち込まれ、大量かつ消費的な観光開発や利用が進んだのも事実である。

こうした中、自然環境とその保全に関する正確な知識と技術を身につけた人材が、国土の自然の保全や持続可能な利用に不可欠との考えからの開校であった。この考えは、「日本にはこんなに豊かな自然や生物多様性があるのに自然を守るレンジャーの数が少なすぎると」訴える作家のC・W・ニコル氏からも

**カリキュラムの特徴——野外実習の意義**

手探りの中です取り組んだのは、自然の現場で生き抜き、やり抜いていく実力づくりである。特定の業種に直結した職業教育ではなく、大学・大学院のような研究志向でもない「野外実習」を中心としたカリキュラムだ。その始まりは、長野県信濃町（黒姫）での実習場開設だった。その基本は連年絶えることなく続いている。

新入生は、オリエンテーションと基礎的な座学（授業）を経た後、五月には早くも第一回目、延べ一週間の野外実習に出かける。黒姫実習場では、簡素な施設の中で寝食を共にし、炊事も共同で行いながら、野外生活や自

然環境調査の基礎を学ぶ。

コンビニや電子レンジが身近になくても生きいくことができる。というのは当校学生の最低限のノルマである。一人ひとりが、燃料調達から火熾し、焚火を行う技術を習得するとともに、共同で薪作りなどを行いながら大釜で数十人分のご飯を炊く。マッチを擦つたことがない、刃物をさわったこともない、という学生も少なくない中で、日常生活はどうんど経験することのないスキルを身につけることは、多様な環境の下での生活・活動の可能性を広げる。都市文明のみに頼らず生き抜いていく力は、世代を超えた環境教育の一つであり、また決してありがたいことではないかもしれないが、不時の災害等緊急時のサバイバルにも通じる。

での海外実習も用意される。

二年次は、前述の山梨県富士川町での三回の実習に加え、世界自然遺産屋久島での実習が組まれ、延べ四十日近くを野外で過ごす。

一年次と大きく異なるのは、植物、哺乳類、鳥類、昆虫類などの分類群ごとに班別のテーマを定めながら調査を進めることである。自分たちの手で捕獲、観察、同定を行い、共同作業を通じた調査成果がまとめられ蓄積されていく。富士川町増穂地区では、これまで二十年余りの実習で、植物約一二〇〇種、哺乳類三十四種、鳥類約一〇〇種をはじめ、魚類、



水生生物調査（山梨県富士川町）

昆蟲類など多くの生物種が、学生たちの手によつて確認されてきた。

野外調査を進めていく中では、それぞれの生物がどのような環境を利用して棲み処や餌資源を得ているのか、人間生活の場に対する鳥獣被害の状況や、その防止のためにどのような対策がとられているのか、など人と自然とのかかわりに関する生の情報に触れていく。

一方、都会のただ中にある現在の本校舎（東京都墨田区）の教室では、生物・生態学をはじめとする自然科学、環境教育、環境工学、環境行政などに関する知識や、各種資格取得に向けた演習、フィールドワークの基礎などを学ぶ。これらは野外での実習活動等と共に、卒業後の生活・職業の場で花開くための裏打ちとして必要不可欠なものである。

卒業後——自然と関わる生活をどのように実現するか？

「自然が大好き」「野生生物を守る仕事をしたい」……ともすれば「自然？：関係ないかも」と切り離されがちな現代社会において、こうした感覚を持って本校に進学してくる学生は、至極真っ当な考え方の持ち主であり、是非ともその夢を叶えてやりたいものだ。しか

行う学生たちは「好きなこと、得意なことが職業に結びつけられるのか？」「自然が素晴らしいから、地域の人とうまくやつていけるだろうか？」など、悩みながら選択していく。実は、野外活動や調査の「技術」だけが「自然と共に生きる」ことを保証してくれるのではないことも気づく。

このため真の「現場力」をつける、あるいは希望する職業とのマッチングを確認するために、各地の様々な現場でのアルバイトやインターンシップを推薦している。こうした経験を経て、社会の中で自然と関わりながら生きていく自分の立ち位置を見つけていくことも重要なステップの一つだ。一方で、「見知らぬ地方に就職したら、近くで先輩の卒業生が働いていた」「卒業生のネットワークを通じて、転職、求人等の誘いがあった」など、緩やかなつながりの中から次の展開を見いだしていく例も少しずつ増えてきている。

最近の動向として見逃せないのは、地方創生の動きである。地域社会を維持していく中で種々の課題を抱える地域や自治体が、その解決のために人材の募集・育成等をはじめている。地域産業の創生・活性化、鳥獣被害対策等々地域の自然や文化を見直しつつ持続

し、夢の実現は決して一筋縄ではないかない。

開校以来「十三年間の卒業生はおよそ一六〇〇名、その大半は就職を目指すが、その業種、業態、待遇などは様々である。当初は、自然に

関わる仕事と言つても、ごく限られた職種が想定されるのみで、ほぼ手探り状態だった。初期の卒業生の中には、アルバイトで食いつなぎながら、起業を試みたり、より良い就職先を模索したりする者も少なくなかつた。

しかし卒業生たちが一つひとつ切り拓いた仕事の場は、世の中の環境志向の追い風も受けた着々と増え、就職実績を有する企業・団体等は、北は北海道から南は沖縄まで一五〇を超えるまでに広がつた。自然環境の保全・再生、自然環境教育や普及啓発、野生生物に関する調査や保護・管理、農林畜産業やツアーガイド、都市の緑の保全や造園・管理など多様な職種が自然環境を学んだ学生たちの活躍の場として門戸を開いている。しかし種々の制約の中で必ずしも安定的、持続的でない職場も少なくなく、決して楽観を許されるものではない。心ある若者たちが全国各地で定着し、活き活きと暮らせる生活・就業の場の確保はまだまだ道半ばである。

限られた時間と選択肢の中で、進路選択を

可能な地域づくりを進めようという方向性に、自然と真摯に対峙できる学生たちの志向がフットする」ことが期待される。

これから国土と社会——人と自然との折り合いは如何に？

人の営みが自然と調和した伝統的な技術や産業の多くは、今絶滅の危機に瀕している。そのこととは裏腹に、人の活動の拡大により棲み処を追われた野生生物や、人との共存の場を人の都合による環境変化により失つた野生生物たちの多くが絶滅の危機に瀕したり、逆に人間生活との軋轢を増やしたりしている。過疎化・高齢化に苦しむ地方、過密化・無縁化で決して住みやすくはない都會……といふステレオタイプに陥らない未来はあるのか？ また人口減少局面に転じた日本の国土を将来どのように利用・管理していくのか？

答えは一つではないかもしれないが、経済的効率などの側面のみから、狭い都市空間に多くの人々が閉じこもる生活だけが明るい未来であるとは考えにくい。

原生的な自然から、身近な自然まで、人工の濃淡をつけながらも、人と自然（野生生物）の濃淡をつけながらも、人と自然（野生生物）